

栽培漁業推進対策事業（スジアラ）

狩俣洋文・仲盛 淳・仲本光男・呉屋秀夫・福德 学^{*1}

1. 目的

本県の高級水産重要魚種であるスジアラの、八重山周辺海域での栽培漁業を推進するため、スジアラ人工種苗の陸上中間育成を実施した。

2. 材料及び方法

平成15年9月19日に、(独)水産総合研究センター八重山栽培漁業センターからスジアラ種苗5,400尾(日令44日・TL27.4 mm(23.6-29.5 mm)・650尾, 日令52日・TL25.1 mm(20.7-35.6 mm)・4,750尾)を受け入れた。輸送には1 tブルータンクを用いた。陸上水槽(円形40 tコンクリート水槽φ4.5×2.2 m)内に、小割網生け簀(3×3×2 m, 目合い3~5 mm)を張り収容した。9月25日に選別を行い大群106尾, 小群4,016尾に分けて大群はFRP 0.5 t水槽に分容した。種苗がショックに弱かったので、全長の測定は行わなかった。10月10日までに、大群92尾と小群1,841尾を中間育成し、両群を同じ網生け簀に収容した。収容時のサイズはTL 43.4(53.4-35.8)mmであった。

給餌は、飼育初期は配合飼料に完全に餌付いていなかったため、アルテミアを併用投与した。種苗の大きさに準じて、5種類の配合飼料を飽食量給餌した。給餌方法は飼育初期には手撒きでこまめに行い、餌付き始めてから自動給餌器も併用した。水槽および網替えは7~10日間隔で行った。

11月26日に、1,891尾に対し左腹鰭抜去による標識作業を行った。標識作業の前後3日間にOTCを経口投与した。

3. 結果及び考察

12月4日まで1,887尾(TL 73.0 mm)を中間育成した。標識作業に伴うと思われる斃死は特に見られなかった。12月末に放流を予定していたが、VNN検査で

2/10尾が陽性となり放流を見合わせた。12月22日に、網底に横たわり、もしくは狂奔する個体が多数見られ、翌日までに全滅した。原因は病変が急であったため、調べられなかった。

VNNの感染経路はわかっていないが、今年度のヤイトハタ種苗生産においてVNNを発症しており、ここからの水平感染が原因と思われる。

4. 今後の課題

中間育成の初期において、個体間の大小差が大きく、小型個体の摂餌不良および共食いによる斃死が続いた。小型個体は殆ど摂餌をしておらず、痩せこけてピンヘッド状態であった。種苗を受け入れる時期と、アルテミアを打ち切る時期を検討したい。

本事業はヤイトハタ種苗生産と時期的に重なるため、器具や生け簀網の消毒、作業員の立ち入り制限などをして、疾病対策を徹底する。

放流種苗の多くは、被食されていることが示唆されており、¹⁾放流種苗の回避能力向上を目的とした馴致法の確立が必要である。また、放流場所の選定や放流方法、適正放流サイズ等について今後検討する必要がある。

文献

1) 浜崎活幸. 新しい栽培種として期待される魚類(1)スジアラ. 日本栽培漁業協会事業年報, 2000; 337-338.

*1 非常勤職員